

とうかいどうちゅうひざくりげ

#24 東海道中膝栗毛

作者：十返舎一九（じっぺんしゃ・いっく 1765-1831）

刊行：正編 享和2年（1802） - 文化11年（1814）

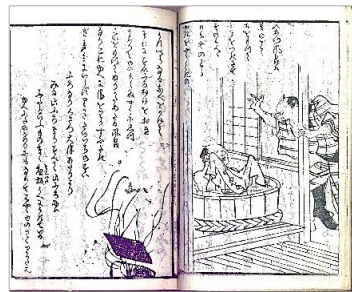
：続編 文化7年（1810） - 文政5年（1822）



解題

■ 内容

『東海道中膝栗毛』は膝栗毛物の滑稽本の一つで、お蔭参りを背景としている。江戸神田八丁堀（実在しない）に住む枳面屋弥次郎兵衛と、その食客で旅役者の喜多八を主人公とした道中話である。初編1冊は品川より箱根までの様子が書かれ、「浮世道中膝栗毛」の名で享和2年（1802）に刊行された。



[K97/24]

これが好評だったため、翌年から文化6年（1809）にかけて伊勢参宮のあと大阪までの道中が書かれた。さらに文化11年（1814）に、主人公の素性を語った発端1冊が追加され、8編18冊となった。これを正編とする。板元は村田屋治郎兵衛で、挿絵・板下とも一九自筆である（初編のみ栄水が描いたとする説もある）。なお、文化7年（1810）から文政5年（1822）にかけて、四国に寄って中山道を通り江戸へ帰る「続膝栗毛」が刊行されており、この続編と発端では喜田川歌麿（二世）、北川式麿、勝川春亭なども挿画を描いている。『東海道名所記』『竹斎』を下地とし、主人公2人の設定は狂言のシテとアドを原型としている。

当館所蔵のものは文久2年（1862）の改板本で、正編の10編23冊である。初版本の5編追加は6編の上巻に、発端は初編の上巻に入っている。本文初めに「滑稽五十三駅」と書かれ、各駅の里数を「加奈川ヨリ程ケ谷ヘ一リ九丁」というように記している。また、序文の多くが削られ、附言や凡例も省

略されており、5編の上巻や10編の下巻では、本文も一部欠落している。

■ 作者

作者の十返舎一九は、江戸後期の戯作者で、駿河府中（静岡県）に生まれる。本名は重田貞一（または貞七）で、通称を与七という。重田氏は千人同心の末裔というが定かではない。幼名を市九または幾五郎といい、一九は「市九」または「幾」をもじったという。江戸に出て町奉行小田切土佐守に仕え、のち大坂に移って浄瑠璃を書いた。その後、江戸に戻って地本問屋蔦屋重三郎の食客となり、黄表紙「心学時計草」などを書いて世に知られるようになる。代表作は「十偏舎劇作種本」「的中地本問屋」など。

 本文を読む

<翻刻>

- 「東海道中膝栗毛」「續膝栗毛」（『膝栗毛 全』博文館 1893）[K97/95]
- 『東海道中膝栗毛』十返舎一九著 有朋堂 1911 [913.55/1]
- 『東海道中膝栗毛』上下 吉川弘文館 1911-1912 [K97/92/1] [K97/92/2]
- 「東海道中膝栗毛」（『滑稽文學全集』第1巻 文藝書院 1917）[917/2/1]
- 「東海道中膝栗毛」「續膝栗毛」「續々膝栗毛」（『日本名著全集 第22巻 江戸文藝之部』日本名著全集刊行會 1927）[918.5/17/22]
- 『頭註東海道中膝栗毛』十返舎一九著 成光館出版 1928 [K97/33]
- 『東海道中膝栗毛』笹川臨風校訂 朝日新聞社 1953 [913.55/8a]
- 『東海道中膝栗毛』上下 竹下直之校訂 いてふ本刊行會 1953
[918/110/15-1] [918/110/15-2]
- 『東海道中膝栗毛』十返舎一九著 岩波書店 1959<岩波文庫> [イ913/シ]
- 『東海道中膝栗毛』上下 十返舎一九著 岩波書店 1973<岩波文庫>
[K97/27/1]（上巻のみ）[イ913/シ A/1] [イ913/シ A/2]
- 「東海道中膝栗毛」（『日本古典文学全集』第49巻 小学館 1976[918/15/49]
- 「東海道中膝栗毛」（『日本古典文学大系』第62巻 岩波書店 1976[918/9/62]
- 「東海道中膝栗毛」（『十返舎一九全集』第1巻 日本図書センター 1979）
[918.5/24/1]

「東海道中膝栗毛」(『新編日本古典文学全集』第81巻 小学館 1995)
[918CC/102/81]

<現代語訳>

「東海道中膝栗毛」(『近世物語文学』第8巻 雄山閣出版 1960) [913.5/4/8]


「東海道中膝栗毛」(『日本の古典』25 河出書房新社 1974) [H918/ニ/25]

『現代語訳東海道中膝栗毛』伊馬春部ほか訳 桜楓社 1976 [K97/36]

『現代語訳日本の古典 21 (東海道中膝栗毛)』杉本苑子著 学習研究社 1980
[918M/18/21] [K97/41]

『池田みち子の東海道中膝栗毛』池田みち子著 集英社 1987
[913.55/30] [K97/51] ※抄訳

『東海道中膝栗毛 第一部 古文調現代訳(品川～新居)』平野日出雄訳 静岡出版 1994 [H913.55/1/1] ※抄訳

 参考文献

『浮世絵事典 中巻』吉田暎二著 緑園書房 1965 [721.8/70/2]

小谷恒「売文業者一九とその作品」(『現代語訳東海道中膝栗毛』伊馬春部ほか訳 桜楓社 1976) [K97/36]

小池正胤「東海道中膝栗毛と十返舎一九」(『現代語訳日本の古典 21 (東海道中膝栗毛)』学習研究社 1980) [918M/18/21] [K97/41]

中山尚夫「『東海道中膝栗毛』篇」(『十返舎一九研究』中山尚夫著 おうふう 2002) [913.55/105]

『「膝栗毛」はなぜ愛されたか』綿抜豊昭著 講談社 2004 [913.55NN/106]

『絵図に見る東海道中膝栗毛』旅の文化研究所編 河出書房新社 2006
[K97/141]

『中西進と読む「東海道中膝栗毛」』中西進著 ウェッジ 2007 [913.55SS/108]